「日本写真保存センター」調査活動報告(1)

松本　徳彦(専務理事)

調査活動の実施

文化庁から委嘱された「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」は、平成19年4月16日の第1回諮問会議(座長・妹尾堅一郎)で、調査活動の大まかな方針を決め、4月28日と5月11日の調査委員会(金子隆一、高橋則英、吉田成、早川与志子、白山眞理調査委員、松本徳彦事務局長)で、物故写真家の遺族に宛てて「写真原板」の保管状況の調査票と実地調査の依頼状を発送することにした。

調査対象はプロ、アマチュア写真家約90名を選び依頼状を送った。6月末までに返送されてきた約50通の調査票と約30通の調査承諾書をもとに、調査委員と補助員(会員の高井潔、小池汪、今駒清則)の日程調整をして、7～9月にかけて25件の調査を実施した。

調査は調査委員と補助員、松本の3名が一つのチームを作り遺族の元を訪ねた。遺族には前もって保管状況の実態を知りたいので、整理し直すとか、片付けるようなことはしないで欲しいと連絡しておいたため、ほとんどのところで現状を把握することができた。

さまざまな保管状況

まず保管場所として、空調の施された部屋の棚や戸棚、ロッカー、桐の和タンスに丁寧に整理されているもののほか、押入、天袋、書棚、部屋の片隅や物置に、紙箱や事務用のトレーに詰めて積み上げられているところもあった。前者は、没後も写真の使用される頻度が高く、いつでも出し入れできるようにテーマ毎に分類整理されていた。後者は他界された後は、ほとんど手を付けていない状態のもので、保管状況は必ずしも良好とはいえなかった。

ネガを保管する容器もいろいろであった。多かったのが事務用のトレーと菓子箱(紙、缶)、封筒類であった。専用のネガタンス(ベニヤ板使用)、プラスティック容器、近年入れ替えられた無酸性のストレージボックスなど多彩。なかには湿気防止にと缶や箱の蓋をテープ止めされているものもあった。

ネガの整理方法もさまざま。ネガカバーにナンバーのほか、撮影日時からテーマ名などをきめ細かく記入されているものもあれば、まったく何も書かれていないもの。ただ番号だけが記されているもの、作者にしか判らない記号のようなものまでいろいろ。ネガカバーをテーマ毎に輪ゴムで束ねられているもの、カバーに色マジックで線を入れての分類などさまざま。

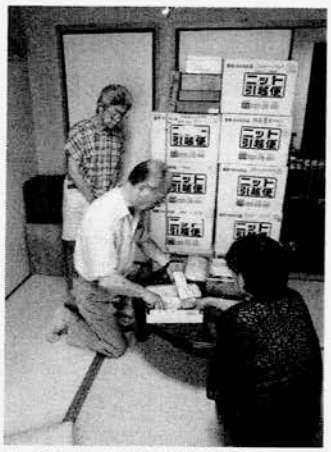
ネガカバーは戦前からあったダイヨット製のものから、DPE店の名が印刷された通常のものまで。協会員の多くはJPS製のカバーに収めるなどほとんどが紙製であったが、中には透明なセロハン製のものもあった。仕事で使用されたネガは切り離され紙袋かビニール袋に入れられ、封筒や小箱に「重要」などと朱書きされて保管されていた。

密着(コンタクトプリント)は半数の人しかしていなかった。その内ファイルに貼って整理されている方が3分の2程度。貼り方も1コマ、6コマ毎に分割されて貼ってあるものから、8×10あるいは四ツ切のまま貼ったものまでいろいろ。

ネガ管理台帳が完備している人はわずか数人であった。ほとんどが無いか、メモ程度であった。

1980年代以前のカラーフィルムのほとんどに退色、劣化が見られた。カビやマウント糊の浸み出しもある。シールされたプラ袋やプラスティックのスライドホルダーなどでの保存は、包材の気密性が高く、ホコリを防止するにはよいが、湿気や発生した酢酸臭を逃がさないので、変退色や劣化が進んでいた。

オリジナル・フィルムからデュープしたフィルムの劣化も激しい。カラーフィルムは低温低湿での保存以外救いようがない


引っ越したままの箱で(川上重治)

押入に収納された原板と作品(島田謹介)

温湿度管理の難しい物置に(藤川清)

空調の効いた撮影原板の収蔵庫(吉越立雄)

との印象を受けた。

「写真原板」保存の難しさを超えて

一部の写真家はカラーポジのデジタル化をされていた。主に4×5インチのフィルムは遺族の手でデジタル化されていたし、専門業者に依頼して大量のフィルムを相当な費用をかけてデジタル化されていた。

「写真保存センター」も収集したフィルムの内、既発表のフィルムを中心にデジタル化して保存、利用に当てようと考えている。しかし、デジタル化に関しては安定的な長期保存の方法が未解決な面があることだ。一方、100年以上の歴史をもつバライタ印画紙にプリントをしての長期保存も予定しているが、費用が馬鹿にならないことである。

いずれにせよ、「写真原板」を長期に保存・管理することは、大変難しい諸問題を抱えている。一番は何といっても人材と経費の問題である。第二はどんな写真を残すのかといった写真選択の問題がある。第三はデータベースの構築とインターネットを介しての統合的な検索システムと利活用の仕組みをどうするかという問題があり、調査活動とは別に、権利処理、保存管理、利活用、ネット構築に関する各分科会で、専門家による検討も進められている。

9月中旬には、フランス文化省のMediatheque Patrimoniale Archive Photographique (Fort de Saint-Cyr)における運営と写真保存、利活用の実態調査をすることにしている。

この「写真保存センター」から世界に向けて、日本の優れた写真を発信できる日の実現が望まれている。

見過ごせないビネガーシンドローム

今回の調査でもっとも強い衝撃を受けたのが、フィルムの酢酸臭を伴う劣化であった。高温多湿の我が国において避けることのできない現象が、ビネガーシンドローム(Vinegar syndrome)の発生である。これまでは1953年以前に製造されていた酢酸セルロース(セルローストリアセテート=TAC)製フィルムの加水分解による劣化が問題視されていたが、調査でそれ以降に製造された国産のフィルムにおいても、この酢酸臭が発生していることがわかったことである。

この現象の多くが高温多湿のほかに、密閉状態の容器に長期間置かれたときに起こっていることである。よく使われ頻繁に出し入れされているネガは問題が少ないのに、通気を遮断したビニール袋、シールしたプラ袋、プラスティック容器などに大事に仕舞われていたものに起こっていたことだった。

ビネガーシンドロームは温度24℃、相対湿度50%の場合、約30年で酢酸臭が始まり、温湿度が高くなるに従って劣化が加速し、フィルムのべとつき、白い粉の析出、波打ち、ワカメ状の変形、画像の崩れ、フィルムベースの破壊へと進むことである。

この酢酸臭は出始めると止めることはできないので、急いでそのフィルムを隔離し、他のフィルムに転移しないようにしなければならない。暫定的な延命措置としては、乾燥した通気性のある紙製の容器に入れ、低温低湿(20℃、50%以下)の環境で保存するしかない。

このことは現役である私たちのフィルムにもすでに起こりつつあることを認識して欲しいのである。ぜひ一度、あなたのフィルム保管環境を調べて頂きたい。酢酸臭がするようであればすぐにも隔離し、通気性のある場所に移すことをお勧めする。なにも古いフィルムばかりではなく、現代においても起こっているのである。早く高温多湿の場所から移し、時折、通気をすることである。

調査委員の印象と意見

調査をして 金子隆一

銀座にある故赤穂英一氏のお宅に調査にうかがって、一番に感じさせられたことは、残されたネガが危機的状況にあるということであった。密閉されたケースに収められていた戦後のネガ・フィルムは、明らかに酢酸臭を発しており、現状のままでは劣化が急速に進む危険をはらんでいた。

ご遺族は、ネガはもとよりプリントや写真関係資料が大事なものであることはきちんと認識されておられるのであるが、保存についての基本的な知識がないため、密封のままが良いのではと思われていたようであった。まだ調査段階であるが、

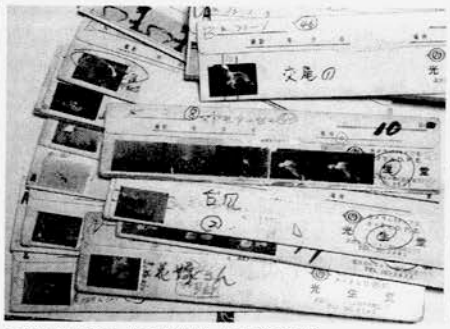
テーマ毎に分類整理されたフィルム(浅野喜市)

和箪笥の通気性を利用しての保存(菊池俊吉)

湿気の多い書棚の下で(松田二三男)

家財道具と一緒に(赤穂英一)

原爆長崎の被災者の写真を貼ったファイル(山端庸介)


コンタクトを貼ったネガカバー(田中徳太郎)

テーマ毎のコンタクト帳(川島浩)

保存についての基本的な知識を周知することが早急に必要であることを痛感させられた。

(東京都写真美術館専門調査員)

緊急に保存の手立て　高橋則英

フィルムベースの加水分解による劣化、いわゆるビネガーシンドロームは、図書館などマイクロフィルムの分野では以前よりその問題が議論されていたが、写真家の間では広く認識されるに至っていなかったと思う。しかし今回、調査に参加して、全てのネガではないにせよ、それが深刻な問題になっていることを改めて感じた。我々の信を置いてきた感光材料は、環境条件によってはかなり不安定なものだったと言わざるを得ない。

写真保存センター構想は戦後の原板を第一の収集対象としているが、ベース劣化の問題という点では、正に現在、緊急に保存の手立てが必要な資料であろう。

(日本大学芸術学部写真学科教授)

膨大なネガの精査が問題　早川与志子

2度の調査に参加し、あらためて痛切に感じたことは、保存センター設立の緊急性である。いますぐに、散逸しているネガを収集しなければ、日本の財産(歴史)が埋もれたままになってしまう、或いは失われてしまうのは明白だ。ご遺族の方はネガを大切に保管されているが、やはり個人の家で出来る限界がある。

また、センターが出来れば、ネガの保管・管理だけでなく、貴重な写真を多くの人に見てもらう機会を作ることも可能だ。問題は、膨大な数のネガの精査など、調査後の次の作業であろう。いずれにせよ、これは規模・内容共に国家的事業であり、一日でも早く実現すべきであると思う。

(明治大学法学部講師)

調査を始めて思うこと　吉田　成

亡くなられた写真家のフィルムを調査させて頂く時には、とても厳粛な気持ちになる。残された写真は遺品の一部であり、そこに故人の遺志を強く感じる。

時代を記録した写真は極めて貴重で、散逸させてはならない。一人一人の写真家のフィルムは全て大切である。

私は、日誌やメモ、ネガ台帳等の写真関係資料も全て一纏めにして保存することが望ましいと考えている。フィルムベースの劣化は、想像した以上に深刻な問題である。改めて、フィルムを保存することの重要性と難しさを痛感している。理想と現実に悩まされながらも、調査結果を真摯に受け止めたい。

(東京工芸大学芸術学部准教授)

写真保存センターへの期待　白山眞理

仏壇の隣りに、別棟の納屋に、桐の箪笥に、弟子の事務所に、居室の家具に、生前の書斎に…写真原板は置かれていた。作家のご遺族が整理したネガはシリーズ別に煎餅や菓子の缶に収められ、シリカゲルも入れてあった。大切にされているのだ。中性紙の保存箱に空調付きの部屋という美術館並みの方法をとっているケースは例外かもしれない。しかし、写真原板保存のためにご遺族は大変な努力を払っていらっしゃると、訪問した全てのご家庭で感じた。

それにもかかわらず、強い酢酸臭が漂い、カラーの変色は著

ビネガーシンドロームによる汚染(大束元)

ビネガーシンドロームによる劣化(中村由信)

トランクに詰められた重要ネガ(吉田潤)

テーマ毎のネガファイルの束(緑川洋一)

カラーファイル棚(山村雅昭)

仕事場に整理されて保存(緑川洋一)

段ボールとコンタクト帳(竹内廣光)

しい。コンディションを保ち続けるのは、確かに難しいのだろう。

ご遺族からは「私が元気なうちは手元に置きたい」、「嫁いだ娘たちにも伝えていきたい」、「できれば買い取って欲しい」など、さまざまな声があった。

保存センターには、個々に事情の異なるご遺族に対し、賛同していただけるような大きな度量が求められていることを痛感した。(日本カメラ博物館運営委員)

作家を敬愛し保存を続ける努力　今駒清則

調査にお伺いした三人の作家たちに限ってですが、現状の収蔵環境は私が予想した以上に良好で、中にはエアコンを備えた収蔵庫を持っておられる所もあり、これは個人でできる極限の環境と考えられます。ネガも大体は分類され、これらは作家自身であったり、没後にご家族が整理分類されたものもあるが、主な作品は作品リストとコンタクトが作成されていて、収集の要件をほぼ満たすものでした。

これは現在ネガなどの管理を続けておられるご家族が、作家を敬愛し大切に保存を続ける努力をされておられたことによるものです。

しかし現在の環境も作家と直に繋がっていた親族の方であればこそできることであって、他でネガなどが廃棄されている事実を散見すると、失礼ながら将来まで決して保証されているとはいえない不安は感じました。

(大阪芸術大学写真学科教授)

酢酸臭を嗅ぎながら　高井　潔

08年の一番暑い夏、調査に参加しました。物故写真家のネガ保存状況を一人ひとりのお宅へ伺って拝見し、記録することでした。調査をされる方も、する方も初めてのことで互いに戸惑っていたのが現状です。

ネガ台帳がまったくない、ネガカバーにも何の記載もない、密着もない、使ったネガがもとに戻ってない、なくなってしまったのか、と状況は千差万別です。いずれのお宅でも、ネガは大切に保存されていますが、あまり大切にしすぎてお菓子の缶に入れてセロテープで密封するという非常に危険な状態のものもありました。もちろん湿気やカビはネガや写真に大敵であります。

そんな中、劣化による酢酸臭を嗅ぎながら、一日でも早く、一人でも多くの写真家のネガを、完全に近い状態で保存したいと、焦る気持ちだけが先行していました。(会員)

家財道具と貴重なネガが同居　小池　汪

時代を記録したメディアはさまざまあるが、写真フィルムは小さな面積に類例を見ない多くの情報を持つ。

「日本写真保存センター」設立の調査活動に随行して、ますますその感を深くした。著名な作品ネガの周辺に魅力的なネガが数多くあり、記録の深さを感じた。

ある著名な写真家は生前、自選ネガをスーツケースに密閉封入していた。この密閉封入は長期保存の点で大問題なのだが遺族はそのままといった状態で大切に保存されていた。

また遺族は「社会に認知された作品、亡きひとの汗の結晶」としてネガを保管することの責任感、そして家財道具と貴重なネガが同居する状態に、不安な家族感情を持っておられた。このご家族の感情に「設立への期待」を強く感じたが、これはいずれ去り逝く私自身の問題でもあると思った。(会員)

缶に密閉したフィルム(吉岡専造)

新しいファイルに入れ替えての保存(新山清)

デジタル化をするカラーポジ(岩宮武二)